「少年の日の思い出」読んだ読んだ　第七場面

「僕」はエーミールに説明しようと試みた。「おもちゃをみんなやる」、「ちょうの収集を全部やる」などといい、あやまる気がない。それには、エーミールが自分のことを「そんなやつなんだな」と言ったからということもあった。エーミールに「僕」のちょうを否定され、殺意が芽生えた。こんな思いをするなら、もうちょうは集めない、自分はだめな人間だと思い、つぶしてしまった。

長屋未来さん

「僕」はエーミールにちょうを否定され、のど笛に飛びかかるところだった。「僕」はちょうを否定され、悲しみ、「自分はなんてだめな人間なんだ」と自分を責め、ちょうを押しつぶした。

真田夏葵さん

「僕」はクジャクヤママユを盗んだことを説明しに行ったが、軽蔑され、殺意を感じたが、自分が盗んでしまったのは、ちょうのせいだと、自分以外に責任を押しつけて、ちょうをつぶしてしまった。

安田匡志さん

「僕」は、「僕」の宝物よりもエーミールの宝石のように価値があるものに出会い、自分の欲望に負けてしまい、エーミールの宝石のようなちょうをつぶしてしまった。だから「僕」は、自分の価値のないちょうを自分の心と同じ闇の中でちょうを一つ一つつぶしてしまった。

加藤奈瑠美さん

「僕」は自分がどうしても見たかったちょうをつぶしてしまった。そのことをエーミールに言うと、許してもらえず、自分のちょうをすべてあげると言っても否定されたため、もうちょうは集めないと思い、つぶしてしまった。

林　真那さん

「僕」は、エーミールのちょうをつぶしてしまい、エーミールに軽蔑的に見られてしまった。それでエーミールに「あいつ」「やる」などという表現から分かるように、反省もせずに、家に帰ってしまった。

そして、ちょうの熱情から事件を起こさないようにするためにも、ちょうをつぶしてしまった。

井上智元さん

「僕」は、エーミールに否定されたちょうはいらないと思ったり、今までちょうを集めていた自分がバカだと思い、ちょうなんかか集めるもんか、と意地になったりして、ちょうをつぶしてしまった。

小河諒花さん

「僕」は、あやまらなければいけないのに、エーミールに上から言ってしまった。そして、軽蔑的な目で見られ、そんな自分を罰するために、大切にしていたちょうをつぶしてしまった。

安達麻衣さん

「僕」はエーミールのクジャクヤママユをつぶしてしまって、エーミールに説明をした。しかし、そこでも一回も謝らなかった。その結果、エーミールが「僕」のちょうを侮辱した、「僕」は、キレそうになったが、エーミールは最後まで冷然としていた。その結果、「僕」は、ちょうを集めていたことに対して、バカだったと思い、ちょうをつぶしてしまった。

伊藤雄一朗さん